参加者募集！まもなく、締切です。

第7回 アマチュア・アンサンブルの日♪

申込締切／4月28日（金）必着

今年もアマチュア・アンサンブルの日♪を開催します。AOIの舞台に立ちたいみなさま、ふるってご応募ください。

第12期「ピアニストのためのアンサンブル講座」（ピアノ伴奏法講座）

聴講生随時募集中!

申込締切／4月23日（日）必着

講師に漆原啓子（ヴァイオリン）、川本嘉子（ヴィオラ）、寺谷千枝子（メゾソプラノ）の各氏を迎え、アンサンブルに取り組みます。

第18回「静岡音楽館AOIコンサート企画募集」事業

申込締切／5月31日（水）必着

静岡の音楽文化の創造的発展を目指して、静岡の演奏家・演奏団体の活動をバックアップし、共同してコンサートをつくりあげていきます。新鮮で意欲的なご応募をお待ちしています。

いずれも詳しくは各募集要項をご覧ください。
募集要項は静岡音楽館AOIのホームページからダウンロードできるほか、7階受付カウンターでご用意しています。

学芸員雑記　《ゴルトベルク変奏曲》、伯爵はどんな羊の夢を見るか？

静岡音楽館AOI 学芸員 小林 旬

映画「羊たちの沈黙」（J.デミ監督、1991）は、ジョディ・フォスターがFBIの訓練生クラリスを、アンソニー・ホプキンスが狂気の天才精神科医レクター博士を演じたサイコ・サスペンス。レクターは自分の患者9人を惨殺、獄中にある。音楽は、近年は「ロード・オブ・ザ・リング」シリーズで知られるハワード・ショアだが、この映画の秀逸なシーンのひとつにJ.S.バッハ（1685〜1750）の《ゴルトベルク変奏曲》BWV988（c.1741）を聴くことができる。レクターは書斎のような特別な独房でそのテープを聴いている。初めの、美しいアリア。伝説のピアニスト、グレン・グールドの録音だ。グールドは1954年と1981年に《ゴルトベルク変奏曲》を録音しているが、レクターが聴いているのは晩年の、諦観の溜息まじりにゆっくりなテンポの演奏だ。ふたりの看守が食事を運んでくるが、一瞬にしてひとりは噛み殺され、ひとりは殴り殺される。鮮血が滴（したた）る光景のなか、アリアはまだ聴こえている──。音楽が残虐性をいっそう際だたせるが、それはこの音楽が美しければこそ成り立つ演出である。

ゴルトベルクとは、ドレスデンの宮廷に駐在した元ロシア公使H.K.v.カイザーリンク伯爵に仕えた音楽家ヨハン・テオフィール・ゴルトベルクのこと。バッハが、優美なアリアと、その低音部を主題とする30の変奏曲からなる《ゴルトベルク変奏曲》を作曲したのは、不眠症に悩まされていたその伯爵の「眠れぬ夜」を癒すために依頼されたものといわれ、ゴルトベルクがそれを奏（ひ）いた──ということから、この作品はそうよばれている。しかしそのエピソードは史実ではないかもしれない。このときゴルトベルクは14歳、この、技巧を凝らした変奏曲を奏ききることが、はたして彼にできたのだろうか。

DVD「羊たちの沈黙」（特別編）
20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン B008CD78AM）

フランチェスコ・トリスターノ ピアノ・リサイタル

7/8［土］18:00 開演（17:30 開場）全指定¥4,000
（会員¥3,600、22歳以下¥1,000）［Pコード=310-103］

出演
フランチェスコ・トリスターノ（ピアノ）

曲目
J.S.バッハ：イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971
フランス風序曲 ロ短調 BWV831
ゴルトベルク変奏曲 BWV988

AOIコミュニケーション ひろば お客様の声

子どもたちが心を広げて音楽を楽しむコンサートでうれしかったです。私も楽しむことができました。
（1/21 志村泉 ピアノ・コンサート ご来場者より）

ご来場誠にありがとうございました。このコンサートは当館の事業である「子どものための音楽ひろば」の一環として、講師を務める志村泉氏にご出演いただくとともに、受講生は講座の1コマで鑑賞しました。そのようなこともあり、お話も交えながらのコンサートとなりました。また、未就学児もご入場いただけるコンサートでした。
当館ではお子さんも一人のご来場者としてお迎えしています。コンサートの鑑賞マナーも学んでいただきたいとの思いから、静かに鑑賞できなくなった場合など、まわりのお客様のご迷惑となる場合には一度ご退席いただくようお願いしています。何卒ご理解くださいますようお願いいたします。

静岡音楽館倶楽部会員の皆さまへ

お名前、ご連絡先、銀行口座等、ご登録内容に変更が生じた場合は、速やかに下記までご連絡ください。なお、平成29年度をもって退会をご希望のかたは、平成30年2月末日までに、静岡音楽館倶楽部事務局へ退会届をご提出ください。ご提出のない場合は自動更新となりますので予めご了承ください。

静岡音楽館倶楽部 法人会員（2017年2月末現在）50音順

- ●（株）アオイテレテック
- ●（株）SBSプロモーション
- ●かわした歯科クリニック
- ●（株）サンタモンコーポレーション
- ●（株）タミヤ
- ●（株）戸田書店
- ●（有）丸吉事務機
- ●（株）メディア・ミックス静岡
- ●ジェイアール東海ホテルズ ホテルアソシア静岡

コンサートシリーズ2017-18
主　催　静岡音楽館AOI 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団
特別協賛　静清信用金庫
協　賛　AIWA アイワ不動産　studio FORUM　ホテル センチュリー 静岡　ANSHINDO

次のことを予めご了承の上、チケットをお求めください。皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。

＊価格は税込です。
＊都合により内容を変更する場合があります。
＊お客様のご都合によるチケット代の返金、座席の変更は致しかねます。
＊場内での飲食、写真撮影、録音、録画は固くお断りいたします。
＊携帯電話、アラーム付時計等の使用はご遠慮ください。
＊他のお客様の鑑賞の妨げとなる行為は固くお断りいたします。
＊静岡音楽館AOIは、施設の構造上、会場準備が整わない状態（開場時間前）で、お客様を8階ホールへご案内することができないため、通常エレベーターは7階止になっております。開場時間になるまで1階エレベーター前か、7階ロビーでお待ちください（ただし、1階エレベーター前でお待ちいただいたお客様を優先してご案内いたします）。
＊静岡音楽館AOIが主催するコンサート（一部を除く）では、未就学児は入場いただけません。

託児サービス
要事前予約（1週間前まで）・託児料：1人1,000円
すわん Tel/Fax.054-255-5377
（火〜金 10:00〜15:00）
e-mail：swan@xqj.biglobe.ne.jp
留守番電話の場合は、お名前・お電話番号を録音してください。

JR静岡駅北口を出てすぐ左　静岡中央郵便局合同建物内

＊当館専用の駐輪場・駐車場はありません。

CONCERT HALL SHIZUOKA
静岡音楽館 AOI

月曜日休館（ただし祝日開館、翌日休館）9:00〜21:30開館
〒420-0851 静岡市葵区黒金町1番地の9
お問合せ
054-251-2200　AOI　検索

AOI通信

静岡音楽館倶楽部情報誌
MARCH 2017 No.85
春号

インタビュー 大岡 淳（演出家・脚本家・批評家）
1940 ―リヒャルト・シュトラウスの家―

インタビュー 小林美恵（ヴァイオリン）

速報 AOIのオープン・デイ2017

コンサート・レポート：
第11期ピアニストのためのアンサンブル講座
修了記念コンサート
新春 宮田まゆみ 笙リサイタル

この春、静岡音楽館AOIとSPAC-静岡県舞台芸術センターが共同して、コンサートと演劇が融合した新しいステージ、「1940ーリヒャルト・シュトラウスの家ー」を上演します。「1940年」をテーマにした、ドイツの大作曲家リヒャルト・シュトラウスをめぐる物語です。今回、脚本を担当する大岡淳さんにおはなしをうかがいました。

インタビュー 大岡淳

（演出家・脚本家・批評家）

静岡音楽館AOI CONCERT SERIES 2017-18 芸術監督 野平一郎　静岡音楽館AOI×SPAC-静岡県舞台芸術センター 共同事業　ふじのくにせかい演劇祭2017 連携プログラム

1940 ―リヒャルト・シュトラウスの家―

講演会　演出家・作曲家の視点から　4/29(土・祝)10:30～12:00
おはなし：宮城聰、大岡淳、野平一郎
静岡音楽館AOI　講堂(7階)　無料(要申込)
お申込み：静岡音楽館AOI　TEL.054-251-2200

4/29[土・祝]13:30開演(13:00 開場) ※15:15 終演予定
※当公演には途中休憩がございません。時間に余裕をもってご来場ください。
全指定¥3,000 (会員¥2,700、22歳以下¥1,000) [Pコード=309-962]

演　出　宮城聰 (SPAC-静岡県舞台芸術センター 芸術総監督)
音楽監督　野平一郎 (作曲家、ピアニスト、静岡音楽館AOI芸術監督)
脚　本　大岡淳 (演出家、脚本家、批評家、SPAC-静岡県舞台芸術センター 文芸部)
出　演　佐々木典子 (ソプラノ)
妻屋秀和 (バス)
中川俊郎 (ピアノ)
花岡詠二 (クラリネット)
劇団SPAC
[奥野晃士、春日井一平、木内琴子、小長谷勝彦、横山央、若宮羊市 (50音順)]

曲　目
R.シュトラウス：4つの最後の歌 ほか
歌劇《無口な女》op.80 より〈音楽とはなんと美しいものか〉
皇紀2600年奉祝曲 op.84 (録音・部分) ほか

――まずはご自身のことについて。演出家、脚本家、批評家として多忙を極めるなかで、ずいぶんクラシック音楽との関わりが、それも中世から現代まで広く深いのは、日本の演劇のなかではかず少ないほうだと思いますが。

そうかもしれませんね。地歌三絃や津軽三味線の演奏家と共演したこともあります。音楽に関わる演出家というと、一般的にはオペラの演出家がおもですが、そのほとんどがクラシック音楽を学んできた人たちです。私はそういう教育は全く受けていないんですが、1992年に芝居をはじめたときから、既成の音楽をBGMに使用することはなく、初期であれば足立智美さん、宇波拓さん、河崎純さんといったユニークな音楽家たちと舞台を創っていました。音楽が、いわゆる「劇伴」として演劇の背景に退くのではなく、音楽も演劇も自律的な関係にあることが、自分の基本的な方針なんです。演劇が空間芸術であるとともに、音楽と同じく時間芸術であることも重視しています。そんなことで音楽への意識が強い方なんだと思います。

――どんな音楽が好きなのですか？

学生の頃はとんがった音楽をたくさん聴いていましたね。イヴァ・ビトヴァというチェコの歌手・ヴァイオリン奏者の、前衛的かつ民俗的な音楽が好きでした。テクノもよく聴きましたし、現代音楽にもとても関心があります。現代音楽のなかには、身体表現を積極的にうちだす作品が多くあって、演劇とたいへん近い関係にあります。

最近だと1960～70年代のジャズを聴くことが多いですね。自分が脚本などの文章を書くやりかたは、クラシック的ではなくてジャズ的です。つまり、あらかじめ結末を決めてしまわないで、即興的に文章を書くことが多いんですね。今回の「1940」は、歴史物なので、プロット（構成）を組み立てて書いていますが。

――今回のプロジェクトは、SPACの宮城聰芸術総監督とAOIの野平一郎芸術監督との対話からみいだされた「1940年」というテーマがあらかじめあって、そこから脚本を担当することになったわけですが、いま、「1940年」にどんな意味があると思いますか？

1940年の日本は、日中戦争のさなかで物資も不足しつつあったんですが、「ぜいたくは敵だ」と言われるほどには、ぜいたくができていた人たちもまだいたわけです。神武天皇が初代天皇に即位してから2600年、皇紀2600年を記念して、東京オリンピックや東京万博が計画されて、結局それらは中止されましたが、東京はまだまだ華やかな消費都市だったんです。ところがそれは太平洋戦争の開戦前夜で、やがて敗戦に向かっていくことになる。つまり、まったく予想もしていないなかで、地すべり的に危機的な時代に突入してゆく――そんなところが、戦争になる・ならないは別にしても、私はもしかしたら今日の状況に似ているものがあるのではないかと感じます。

そもそも演劇は戦争と密接な関係があり、ギリシア悲劇・喜劇の傑作の多くはペロポネソス戦争の時代に書かれたんです。演劇をいくらやっても戦争を止めることはできないけれど、衰退や滅亡を、人はただ見過ごすことはできない。なぜこんな事態が起きてしまうのか、ということを演劇によって考えてきたわけで、そういう観点から自分の演劇は有効でありたいと思っているので、今回のテーマは自分にマッチしていると思います。

――そこで今回は、日本が太平洋戦争に向かう状況を、リヒャルト・シュトラウスに触れて描いていきますが、シュトラウスの代表作というと、交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》(1896)や歌劇《サロメ》(1905)、アルプス交響曲(1915)など、ほかにもいろいろありますが、その多くは彼の創作の前半にあって、とくに1940年頃はもうすでに、彼の創作は衰えていたように感じられますが、どうなのでしょう？ もちろん晩年にも《4つの最後の歌》(1948)や《メタモルフォーゼン》(1945)などすばらしい作品はありますが。

う～ん、たぶん長生きし過ぎて、見なくていいものまで見てしまったんじゃないでしょうか。ナチスが抬頭して以降、シュトラウスが見なくてもよかったはずのなにか・・・・。標題音楽の手法、つまり、言葉や物語や情景などを音楽化する手法に長けていたシュトラウスの作曲は、19世紀音楽と20世紀音楽なので、転換期をどう乗り越えていくか、という試行錯誤のひとつだったと思うんですね。それなのに、20世紀のなかばまで長生きしました。ほんとうはもう引退していてもおかしくないのに、ドイツの優れた芸術家たちがナチスを避けて亡命していくなかで、老いたシュトラウスがナチスから帝国音楽局総裁というドイツ音楽のトップ・ポジションを与えられ、彼なりの使命感からそれを引き受ける。そして敗戦後まで生き延びてしまったのは、作曲家としては幸福だったのか不幸だったのか。いまの高齢化社会にあって、芸術家も高齢化していくとき、老境にあってなにをすべきか、ということを考えさせられますね。

――今回の脚本は、いったいどんな物語になるのでしょう？

大雑把に言うと、オリンピックと万博は中止になりましたが、1940年の皇紀2600年を記念した大々的なイベントだけは、なんとしても開催することになりました。徐々に孤立しつつあった日本が国際的な威信を回復するという目的もあったと思いますが、そこに、世界の名だたる作曲家たちから祝典曲が寄せられる。そのもっとも重要な作曲家にドイツのシュトラウスがいて、今回の物語は、皇紀2600年奉祝会がシュトラウスに祝典曲を委嘱するところから、その作品が初演されるまでを描きます。このとき日本のドイツに対する関係は、外務省と陸軍と海軍が三つ巴で情報収集していて、陸軍はドイツと同盟を結びたいと考えている。海軍トップはそれに反対している。しかし結局は、日本は独伊と手を結んで米英に敵対するという歴史的な失敗をしてしまう。それはなぜなのか？ 想像やフィクションをおりまぜながら、史実の裏側の人間模様を描いてみたいと考えています。シュトラウスの生涯や三国同盟の制定過程についての予備知識がなくても楽しめる、スパイ小説（エスピオナージュ）のような味わいで、1940年の光と影がみえてくればと思っています。

――スリリングな政治的なサスペンスになりそうですね。
ところで大岡さんはSPACでの活動のほか、静岡文化芸術大学で教鞭を執り、以前は袋井市月見の里学遊館芸術監督を務めるなど、静岡の芸術文化のキーパーソンのひとりですが、静岡の文化についてどのように考えていますか？

静岡は、東京のような大都市と違って、SPACやAOI、県や市の美術館など個性的な文化施設がコンパクトに存在していて、さらに公立以外でもいろんな動きが現れてきて、多様なジャンルの文化に気軽に触れることができる街だと思います。ジャンルを超えて、いろんなコラボレーションが活発になれば、もっと新しい文化を創っていけるんじゃないか、という可能性を感じますね。

ただ、そこには「批評」がないとだめだなぁとずっと思っていて、これは静岡に限ったことではないですが、「批評」というのは、作品に触れて、自分が生きるうえで、それがどういう意味があるのかを言葉にするということなのだけれど、そういう営みがないと、芸術はたんに「高尚な趣味」に留まってしまう。たとえば、子どもたちが劇場で芸術に触れることが必要であるなら、それはなぜなのかを語れなければならないですよね。もしくは、高齢化社会で、定年になってからまだ10年も20年も時間があって、なにを自分の生きがいにしていくかというときにも、芸術はたぶんそれを充たすことができると思いますが、その意義も言葉にする方がいい。静岡の人たちが、もっともっと自分にとっての芸術の意義を語り、議論することができれば、人々が文化を向上させ、文化が人々を向上させることにもなるだろう。人が社会的な権利と責任を担う市民であろうとするために必要な倫理観は、このような批評精神から生まれてくるのではないか・・・・というのが私の考えです。

――では、最後に今回の舞台への意気込みを。

自分の音楽観を、この戯曲にぶつけてみたいです。あとはもう、AOIの野平一郎芸術監督とSPACの宮城聰総監督のふたりに怒られないようにがんばります（笑）

聴き手：小林旬（静岡音楽館AOI 学芸員）

インタビュー 小林美恵（ヴァイオリン）

AOI・レジデンス・クワルテットのメンバーとして、毎年、必ずAOIの舞台に登場する小林美恵さん。2017年度はAOI・レジデンス・クワルテットの公演だけでなく、6月17日に行われる「子どものためのコンサート 小林美恵（ヴァイオリン）＆野平一郎（ピアノ）ヴァイオリン名曲選」でも演奏を聴かせてくださいます。そんな小林さんにお話をうかがいました。

ヴァイオリンを始めたのはいつですか？ そのきっかけも教えてください。

一応、4歳ということになってはいますが、実はよくわからないのです。3歳上の兄がヴァイオリンを習っていまして、そのレッスンについて行って、私もやりたいと言ったのですが、先生にまだだめと言われてしまい、それでもどうしてもやりたい！と言ったのだそうです。一番小さい1/16サイズでも持てないくらい、小さかったのですよ。とりあえずはものさしと鉛筆でヴァイオリンを弾くまねごとをしていました。

ただ、3歳の誕生日のとき、バースデーケーキの前でヴァイオリンを構えている写真があるので、そのころには弾いていたのだと思います。

よく、ヴァイオリンはかなり早く始めなければ、と言われていますが、本当に早かったのですね。ご両親は音楽をされていたのですか？

両親は音楽をなにもしませんが、家の中が明るくなるような、楽しいことをやらせたいと思い、何か楽器を、ということになったようです。近くにヴァイオリン教室があったこともあり、まずは兄が、それに引き続いて私も、という感じです。

その後、ピアノも習うようになりましたが、そのころにはヴァイオリンのほうが断然弾けましたし、ピアノは両手だし、足も使わなくちゃいけないし、ヴァイオリンのほうが好きでしたね。

小さいときはどんなお子さんでしたか？

外で遊ぶのが好きな活発な子どもで、そのころ流行っていたドッジボールをよくしていました。学校が終わると1～2時間くらい皆でドッジボールをして、家に帰って夕飯まではヴァイオリンを練習して、ごはんを食べたら勉強、という毎日だった気がします。

ヴァイオリンは言われなくても練習していらっしゃったのですか。

あまりよく覚えていないのですが、ルーティンとしてやっていました。家庭の方針として、ヴァイオリンはあくまでお遊びというか習い事のひとつでした。優先順位としては勉強のほうが上で、勉強しなさいと言われたことはあってもヴァイオリンを弾きなさいとは言われなかったですね。だから高校（東京藝術大学附属高等学校）に入ってずっとヴァイオリンを弾いてよくなって、すごく嬉しかったです。

やはりとてもヴァイオリンがお好きだったということですね。
今回は「子どものためのコンサート」ということでお願いしていますが、ふだんのコンサートと違うことはありますか？

3歳から入場できるということなので、たぶん初めてヴァイオリンを聴くというお子さんたちがたくさんいらっしゃると思います。そんなお子さんたちにヴァイオリンっていいなと思ってもらいたいです。「初めて」というのはとても大切なことなので、そう思うととても緊張しますね。子どもは音楽にとても純粋に接してくれる気がします。きっと初めて聴く曲も多いでしょうし。大人だと敬遠してしまうような現代曲も、意外にすんなり受け入れてくれたりしますしね。もっとも、30分もかかるような大曲を聴くのは大変だと思うので、短い小品を集めてみました。

プログラムについて教えてください。

今回演奏する曲はどれも思い入れのある曲ばかりです。

ドヴォルザークの《ユーモレスク》は、発表会ではじめて一人で弾いた曲（もちろん、調は違いますし、簡単に弾けるように編曲されたものですが）で、私にはとても大事な曲です。4歳か5歳だったと思います。大好きでした。弾くたびに初めて弾いたなぁって思いだします。今回、演奏することになって嬉しいです。

プロコフィエフの《行進曲》は1分くらいの短い曲ですが、ブリキのおもちゃとかぬいぐるみがガチャガチャ出てくる感じ。

ポンセの《エストレリータ》もとってもきれいな曲です。前にもAOIで弾いたことがありますよ。

バルトークの《ルーマニア民俗舞曲》は、小さい曲が6つある作品です。これも小学生の時に初めて弾いたのですが、途中のハーモニクスのところが蛇使いみたいだなぁと思っていました。本当は違うのですけれどね。

ファリャの《スペイン舞曲》はフラメンコの華やかな感じが大好きです。

《ツィゴイネルワイゼン》はそれこそ憧れの曲で、先生にどんな曲が弾きたい?と訊かれるたびに「ツィゴイネルワイゼン！」って言っていました。まだちょっとね…と何度も言われ、中学生になってようやく弾けることになりました。もう嬉しくて嬉しくて。そのときの嬉しさは忘れられません。

それからラヴェルの《マ・メール・ロワ》はオーケストラで弾いたらとても感動したので、ヴァイオリンとピアノでも弾きたいなぁと思って選びました。

ストラヴィンスキーの《ディヴェルティメント》はバレエ音楽《妖精の口づけ》から抜粋された組曲です。氷の精や妖精の女王が出てくるお話で、ディズニー作品も弾く予定なのでそれに因んでみました。

小さい時に聴かれたコンサートで思い出に残っているものはありますか？

イ・ムジチ合奏団の《四季》を聴いたときはすごい衝撃を受けました。なんだか金縛りにあったみたいにしばらく椅子から立ち上がれなかったことを覚えています。たしか小学校1年か2年の時だったと思います。弦楽器のアンサンブルを聴いたのが初めての経験だったので、こんな響きがするのだと思って。それと「四季」だから4曲だと思っていました。実際は〈春〉〈夏〉〈秋〉〈冬〉の各曲にそれぞれ3楽章あるのですね。母に教えてもらい納得しました。そのこともすごく記憶にあります。

他にはイツァーク・パールマンとウラディーミル・アシュケナージによるベートーヴェンの《クロイツェル・ソナタ》をTVで見たときのことが印象深いです。TVに釘付けになりました。私も弾きたい！と思いました。やっぱり「もうちょっと大人になったらね。」と先生に言われ、大人にならないと弾けない曲なのだとインプットされてしまいました。そのせいかこの曲に取り組んだのはずいぶん後になってからです。

2015年にデビュー25周年を迎えられましたね。おめでとうございます。振り返ってみていかがですか？

あっという間の25年でした。ただ、以前は何人も集まって演奏するときは自分が一番若かったのに、気が付いたら最近は一番年上、ということが多くなって……。年月を感じます。

とはいえ、弾きたい曲はまだまだ山のようにありますし、同じ曲でも弾くたびに全然違ってくるので、弾けるうちになるべくたくさんの曲を弾きたいです。25周年記念のリサイタルシリーズ（全6回）が4月で終わるのですが、来年からまた新しいシリーズが始まります。今のシリーズで、やりたかったのにプログラムに取り込めずにあきらめた曲がたくさんあって。曲を通じて、私も、そして聴いているお客様もそこから発展していろいろな世界（作品を中心としてその時代や、その時代のほかの作品、影響を受けた人たちとか）に踏み込んでいく橋渡しができたらいいなと。ひとつの作品が生まれるには前とのつながりがあるわけで、例えばバッハの無伴奏ソナタやパルティータにしても、いきなり出てきたわけではなくて、その前の時代があるからこそだと思うのですよ。そういうことも含め、幅広く知るきっかけになったらいいですよね。音楽は美術や文学、数学などから絶対に切り離せないですし。そんなことを考えながらプログラムを練っています。プログラムを考える時が一番大変なのですが、一番楽しいです。まぁ、いざ準備をし始めるととても大変な曲ばかりで、しまった……と思うこともよくあるのですが。

あとはシリーズを聴きに来てくださるお客様同士が顔なじみになられているのをみるとこちらも嬉しくなります。そういうつながりも大事にしていきたいと思っています。

今後のさらなるご活躍を楽しみにしています。
では最後にお客様にメッセージをお願いします。

6月のコンサートでは曲のことなど、お話も交えながら進めていきたいと思っています。お子さんはもちろんのこと、大人の方々も子どもの頃に戻って一緒に楽しんでいただきたいです。

とても気さくにたくさんのお話を聴かせてくださった小林さん。そのお人柄に触れて、ますます演奏が聴きたくなりました。コンサートが今から待ち遠しいです。

聴き手：関本淑乃（静岡音楽館AOI 学芸員）

子どものためのコンサート

小林美恵（ヴァイオリン）＆野平一郎（ピアノ） ヴァイオリン名曲選

6/17［土］
15:00 開演（14:30 開場）

全指定¥2,500（会員¥2,250、22歳以下¥1,000）
親子券¥3,000［Pコード=310-101］
※3歳児よりご入場いただけます（チケットが必要です）。

曲目
S. プロコフィエフ：行進曲（組曲《3つのオレンジへの恋》op.33bis より 第3曲）
M. ポンセ：エストレリータ（小さな星）
B. バルトーク：ルーマニア民俗舞曲 Sz.56
M.d. ファリャ：スペイン舞曲（オペラ《はかなき人生》第2幕 より）
A. ドヴォルザーク：ユーモレスク 変ト長調 op.101-7
P. サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン op.20
ディズニー作品 より
I. ストラヴィンスキー：ディヴェルティメント より（バレエ音楽《妖精の口づけ》より）
M. ラヴェル：マ・メール・ロワ（野平多美 編）より ほか

速報 AOIのオープン・デイ2017

8/5（土）
10:00～20:00
会場
静岡音楽館AOI
ホール、講堂 ほか

静岡音楽館AOIをより身近に感じていただくために、今年も「AOIのオープン・デイ」を開催いたします。さまざまな催しをご用意してみなさまのお越しをお待ちしています。ぜひAOIへ足をお運びください。
なお、お申し込み方法等詳細は5月ごろ、チラシ、ホームページ等でご案内いたします。

すべて入場無料

モーツァルト 名曲の夕べ 要申込
「静岡の名手たち」アンサンブル

18:00 開演（17:30 開場）＊20:00 終演予定 **ホール（8階）**

出演
野平一郎（指揮）
諸田大輔（フルート）
「静岡の名手たち」アンサンブル ほか

曲目
W.A.モーツァルト：ディヴェルティメント ニ長調 K.136（125a）
フルート協奏曲第2番 ニ長調 K.314
交響曲第41番《ジュピター》ハ長調 K.551

定員 600人（全自由・要申込・多数抽選）
＊未就学児はご入場いただけません。託児サービスはありません。

撮影：相田憲克

撮影：日置真光

キニナル スキニナル プロジェクト
静岡市文化振興財団

入場無料・申込不要・出入自由！
パイプオルガン、やってるよ♪

出入は曲間でお願いいたします

10:30 開演（10:00 開場）＊12:30 終演予定 **ホール（8階）**

出演
長井浩美（オルガン）
中川紫音（オルガン）

定員 600人
（全自由・申込不要・当日先着順）
＊ただし定員によりご入場をお断りする場合があります。

曲目
J.S. バッハ：トッカータとフーガ ニ短調 BWV565
G線上のアリア BWV1068
主よ、人の望みの喜びよ BWV147
S. フェイン：《眠れる森の美女》より〈いつか夢で〉
松谷卓：TAKUMI ／匠 ほか

AOIの舞台裏をのぞいてみよう！
はじめてのAOI 要申込

舞台袖や楽器庫などを、静岡音楽館AOIの学芸員がご案内します。

ワクワク！

いろんな楽器にふれてみよう！ 申込不要

12:00～17:30 講堂、リハーサル室1（7階）

体験できる楽器：
ヴァイオリン、フルート、クラリネット、トランペット、トロンボーン、ドラム（サイレント）、ピアノ、エレクトーン

＊途中、楽器ごとに休憩をいただく場合があります。予めご了承ください。

そのほか、
- ●ロビー・コンサート
- ●音と音楽のサイエンスショー
- ●あなたの楽器の無料診察室
- ●ショップ・コーナー

などを予定しています。

CONCERT REPORT
コンサートレポート

第11期ピアニストのためのアンサンブル講座 修了記念コンサート 2017年1月8日

真嶋雄大
（音楽評論家）

2017年の松が明けた1月8日、第11期を迎えた「ピアニストのためのアンサンブル講座」の修了記念コンサートが開かれた。今回講師を務めたのは、当音楽館の芸術監督である野平一郎氏をはじめ、漆原啓子氏（ヴァイオリン）、川本嘉子氏（ヴィオラ）、そして寺谷千枝子氏（メゾ・ソプラノ）という日本を代表する音楽家たち。また第11期を受講したのは、桐朋学園大学4年在学中の江村理沙さん、桐朋学園大学卒業後東京藝大大学院に在籍している香川明美さん、東京音大卒業後同大学院を修了した川村恵里佳さん、桐朋学園大学卒業後同大学院を修了した立川美香さん、そして桐朋学園大学卒業後東京藝大大学院を修了した西原侑里さんという5人の若きピアニストたちである。

講座は2016年8月、10月、11月、12月にそれぞれ2日間ずつ開催され、修了コンサートの前日にも総仕上げとなるレッスンが行われた。このレッスンから拝聴させていただいたが、内容は実に濃密で、全体像を捉える造形から細部に至るまで、その指導は微に入り細を穿つ。単なる音楽の成形に留まらず、なぜこの部分はこういう表現でなくてはいけないのか、こういう音色でないといけないのかなどの楽曲解析や成立動機による示唆などをも含み、また同時に個性を俯瞰した指導が続けられていく。こうして緻密かつ芳醇なアンサンブルが徐々に構築されていくのである。

さて修了記念コンサートである。15時開演であるが、こういった性格の演奏会としては、かなり多くの聴衆が参集している。この傾向はここ数年で特に顕著なのだそうだ。コンサートでは、受講生がそれぞれ講師とデュオを組んで演奏するのだが、この日、登場予定であった立川美香さんがインフルエンザのため、急遽出演を取りやめるアクシデントがあり、それに付従してのプログラムの変更があった。立川さんは、寺谷氏と演奏する予定であったため、以前の講座で学んだシューベルトの歌曲集《冬の旅D911》の中から3曲を川村さん、香川さん、西原さんが各々分担して演奏したのである。

コンサートはまず、江村理沙さんと漆原啓子氏のデュオから始められた。曲はモーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ第25番K.301」。流麗で自然な音楽的流れ、モーツァルトらしい声部の表出が心地良い。続いて川村恵里佳さんと寺谷千枝子氏によるシューベルト《冬の旅》の中の第5曲〈菩提樹〉が優美に演奏され、川村さんと川本嘉子氏によるブラームス「チェロ・ソナタ第1番」の第2、第3楽章。こちらもブラームス特有の仄暗い響きと内に秘めた情熱がエモーションとなって溢れ出る。後半は香川明美さんと寺谷氏による《冬の旅》第11曲の〈春の夢〉が馥郁たる情感で歌われ、続いて香川さんと川本氏によるブラームス「クラリネット（ヴィオラ）・ソナタ第2番」第1、第3楽章が演奏されたが、ブラームスの持つ独特の広い空間と情景をしっとりと表現して印象的。そして西原侑里さんと寺谷千枝子氏は《冬の旅》の第1曲〈おやすみ〉では切なさと憧憬の入り混じる情感を示し、西原さんと漆原啓子氏によるベートーヴェン「ヴァイオリン・ソナタ第3番」の第2、第3楽章では、清新な息吹に満ちた溌剌たるベートーヴェンを紡いで秀逸であった。

その後は講師演奏となり、漆原氏と野平氏によるドビュッシー「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」、寺谷氏、川本氏、そして野平氏によるブラームス「2つの歌op.91」。両者ともに堂々たるスケールで作曲家の核心に迫った見事な芸術の吐露であり、潤沢な音楽性に彩られた気品あるロマンティシズムは極めて鮮烈、まさに指標となる演奏であった。

ピアニストにとって、ソロはもちろんだが、アンサンブルもきわめて重要なファクターであるものの、これだけの講師を招き、多角的、また立体的に学べる講座は日本においてそうあるものではない。この貴重で充実した講座の継続と大きな発展を願ってやまない。

撮影：日置真光

新春 宮田まゆみ 笙リサイタル 2017年1月14日

徳丸吉彦
（聖徳大学教授・お茶の水女子大学名誉教授）

笙は管の中のリードを人間の息によって鳴らす楽器で、英語ではmouth organ（口オルガン）と呼ばれます。息を吹き込む所に、それぞれの音高を出す管を挿入しますが、その方法がいろいろあります。東南アジアの少数民族の人々の笙は管が四方八方に向いていますし、ラオスやタイ東北部でケーンと呼ばれる笙は二列の管が筏のように組まれます。古代に中国から伝えられた日本の笙は、円環状に管が立っていますので、その形は想像上の鳳凰（ほうおう）に喩えられてきました。

日本の笙は雅楽の中で唐楽として整理されているレパートリーの楽器です。唐楽では、笙は龍笛（りゅうてき）・篳篥（ひちりき）とともに吹き物の仲間です。笙の音量は他の二つの楽器よりも小さいのですが、リードの響きと複数の音が同時に鳴る響き（合竹）によって、全体の響きを豊かにします。

プログラムの前半に雅楽の装束で現れた宮田まゆみさんは、独奏によって笙の響きを聴かせました。続いて、篳篥・龍笛とともに平調の音取と《越天楽》を演奏しました。舞を伴わない雅楽を管弦と呼びますが、これは仲間で演奏する室内楽として平安時代の日本で始まった方法です。管弦による《越天楽》では多くの場合、吹き物の他に琵琶と箏、それに三種の打楽器が加わりますが、今回は笙・篳篥・龍笛の三人だけでも管弦が楽しめることを示しました。続けて、《春庭楽（しゅんていらく）》がその前奏（調子と呼びます）とともに同じ編成で演奏されました。三つの楽器の重なり合いと、響きの違い、そしてアンサンブルの方法が非常によく分かる演奏でした。

プログラムの後半で、宮田さんは衣装を西洋風に改めて、まず、ジョン・ケージが彼女のために作曲した《One⁹》を演奏しました。これは笙の響きを細部まで知っていたケージの名作です。古典では単音の他に四音から六音の合竹が使われますが、この曲では単音から七音までの合竹が古典とは異なる動きで組み合わされています。音を合わせた時に響く倍音まで考慮された作品に聴こえました。この音楽に対しては、時間の中で区切られる音のグループを聴き手自らが組み合わせて聴くことができます。今回の静岡の聴き手は静寂さを保ちながら、演奏者の動きを注視し、次に出てくる音を待ち、音と音の間の無音の間も鑑賞しました。

野平一郎作品《内なる声》も笙独奏曲です。ここでは古典奏法にはない鋭い音の出し方も使われたので、私はラオスのケーンを思い出しました。古典にはないような長い音と短く変化する音の組み合わせで笙に新しい可能性を与えました。

伊藤弘之作品《鳳鸞（ほうらん）》で笙はハープと合わせます。曲名の鳳鸞の鳳は鳳凰の雄、鸞はやはり中国の想像上の鳥で、鳴き声が音階に合うとされた鳥です。複雑で微妙な調弦によるハープと笙の組み合わせが見事でした。力強いハープの響きと、静かな笙の響きの組み合わせも、笙に新しい可能性があることを示すものでした。

細川俊夫作品《うつろひ》もハープとの曲です。舞台中央にハープが置かれ、笙はその周りを、半円を描くように移動して、五つの場所で演奏します。それぞれの位置が音楽のあり方を決めています。例えば、第二の位置ではハープの「動」と笙の「静」が対立し、第三の位置で両方が「静」を作るという具合です。笙とハープとの組み合わせ方や笙を移動させる方法を含め、笙に新しい可能性を与えた作品です。

以上の現代作品の後で、宮田さんが《壱越調調子》の独奏で演奏会を締めくくりました。調子は冒頭でも演奏されましたが、現代曲を聴いた後での古典の響きは、聴き手にまた新しく発見させるものがあったはずです。演奏の前に行われた簡潔な楽器紹介（笙の宮田さん、篳篥の中村仁美さん、龍笛の八木千暁さん、ハープの吉野直子さん）も音楽の理解を助けました。

今回の音楽会は、大きな音を好む現代の社会にあっても、静かな音楽に耳を傾けることの魅力と大切さを示すものになりました。これを実現したのは、優れた企画、優れた演奏家、そして優れた聴衆の組み合わせでした。

撮影：日置真光